

平成30年3月1日（木）

学校新聞「玲瓏」

秋田県立本荘高等学校 校長 今井 智幸

### 人間のもつ可能性と素晴らしさ

特に将棋ファンでもない生徒でも、ヒフミンで知られた加藤一二三九段の活躍、中学生棋士藤井聡太四段によって塗り替えられた連勝記録、そして羽生善治竜王の「永世七冠」達成など、昨年、将棋界の話題に触れたことがなかった生徒は少ないだろう。私が高校生の時、アマチュアとの指導対局であっても、無意識に放ってしまう加藤プロ棋士の圧倒的な迫力や著書にサインをもらった時の緊張感は、今でも懐かしくよみがえる。

コンピュータの実力がプロ棋士を上回り、ソフト不正疑惑に揺れていた将棋界の重い霧を、藤井四段はプロ入り一年目の快進撃によって一気に吹き払った。勝っておごらず、マスコミのフィーバーぶりに浮かれることなく、伏し目がちに誠実に報道陣に答える姿は、中学生とは言えプロ棋士の厳しさを知る者の証でもある。

プロの棋士になるには、全国の神童が集う養成機関の奨励会に入り、26歳までに四段にならなければならない。プロになれるのは、熾烈な競争を勝ち抜いた一握りの天才だけ。しかも、晴れて四段となっても、棋士の序列を決める順位戦が待つ過酷な世界が、プロの将棋界である。藤井四段の師匠杉本昌隆七段は、盤上は命の取り合いと言う。

国民栄誉賞の受賞が決まった羽生善治竜王（47）は、15歳でプロ棋士、19歳で初タイトル竜王を獲得、25歳で七冠制覇。三度のチャンスを逃しながら、今回、初タイトルと同じ竜王を28年後に獲得し、前人未踏の「永世七冠」を達成した。難解な局面にあって、定石にとらわれない卓抜した構想力、決断に裏打ちされた創造的な一手、熟慮の末の斬新な一手は、独創的かつ美しく、観る者に感動を呼び起こす。25歳の時の七冠制覇が天賦の才のきらめきによるとすれば、今回の「永世七冠」達成は、たゆまぬ努力・精進と将棋への尽きない情熱によるものである。勝利を確信した羽生竜王は、駒を置く手が震えることがある。「永世七冠」達成は、将棋ファンたちの心を震えさせた。

対局中は、迷いや恐れといった自分自身の中にある弱い気持ちとも戦っていると言う。敗れても幾度となく立ちあがり、勝負手を繰り出し、歴史に名を刻んだ。その偉業は、人間のもつ可能性と素晴らしさを世に示すものでもある。負けた時こそ成長するチャンスとし、頂点に立ってもなお、学び、努力し続ける。挑戦者の姿勢を失わない羽生永世七冠は、「努力の天才」でもある。座右の銘は、「運命は勇者に微笑む」である。